

話しことばと定型化

澤 田 茂 保

0 はじめに

話しことば (spoken language、以下 SL) は、それがやりとりされる場面に依存した言語である。人が経験する場面の多くは日常的に繰り返される場面である。場面が類似していれば同じような表現が繰り返されて、それが SL における定型化の特徴につながる。本稿では、語彙と構造に強い制限を設けて、その範囲内での英語における SL の定型化の事例を観察する。語彙は機能語類に制限し、構造は学校文法での第 1 文型から第 3 文型に限定する。SV(M)、SVC、SVO の構造を持ち、かつ機能語だけから構成される定型的表現について、以下で順に事例を観察して、最後に日本語と英語の定型化の違いについて簡単に触れる。

1 SV(M)のパターン

まず第 1 文型で見てみよう。一般に、単純な SV が定型化する例は少なく、何らかの修飾部(M)がある。ここでは $S=\{you, we, they, it\}$ 、 $V=\{be, go/come\}$ 、 $M=\{here, there\}$ の条件で観察する。定型的な表現では通例 M は前置されて、強勢が置かれる。

1.1 here/there you go

基本的に何かを差し出すときに使われる表現である。ものを差し出すことは日常的に繰り返し経験する場面であり、その繰り返しが定型化につながる。

(2)は(1)よりも若干ぞんざいな言い方で、社員食堂のカウンター越しでの場面である。

- (1) “Here you go, Miss. One New York steak, medium-rare, just like you ordered.” (TZ01)¹
- (2) A: “One club sandwich, coleslaw, no fries, coffee black.”
B: “There you go.” (TZ02)

ものを差し出されたら、受け取るなり、食べるなり、何か行動を起こさなければならない。英語でモノを差し出すときに go を使うのは、相手に対して次の行動を促そうとする言い方に定型化しているからである。“Here we go!”となると、聞き手とともにある動作を行うことを促す意味になる。また、“Here it goes!”であれば、モノに対する動きへの掛け声のような言い方である。一般に、Here we go は主語が we なので何らかの意味で予期できる行動であり、Here it goes は物の動きで予期できないニュアンスがある。従って、後者は、例えば、紙飛行機などを飛ばすときの掛け声のようである。

副詞 again が付加して、There you go again になると、ある種の反応表現の一つとして使われる。この場合は、相手が愉快なこと（あるいは不愉快なこと）を繰り返すので、それに対して、「またしている」と軽く注意するような意味になる。(3)では、若い女の子の A が、同年齢に見える B が 50 年代のおかしな英語を使うことを批評している場面である。

- (3) A: “One minute you talk like a professor, and the next minute you sound like eh..., what did they call them?,...“Beatnik” or something.”
B: “Ah, thanks. You’re a real cool chick.”
A: “There you go again!” (TZ03)

B が Beatnik 世代のことばを使っているということへの応答で、“cool chick”

と Beatnik 世代の表現をまた使ったので、「ほら、また、いつている」と応じている。

(3)の go は行動というより、口からことばを発する意味で使っている。(4)も同様で、「じゃあ、こういうことなんだね」といって、状況説明をする前置きとして使われている。

- (4) “Well, there you go then. It’s snowing and dark. We climbed out of the bus with our eyes closed, because of the snow fall. Anyone could have come with us, and we wouldn’t have noticed.” (TZ01)

(3)や(4)では、go はほぼ say の意味で使われている。SL では、go を say の意味で使用することがある²。

- (5) a. I think when you see someone and you go, “That person’s strong,” very often it doesn’t have anything to do with their physicality. [EJ2006_02]³
 b. Then I said to him, “Sorry!” He’s like, “You’re still doing it!”
 And I went, “S...” and stopped, ... [EJ2005_07]

発話動詞の say は中立的な動詞だが、go の場合は内容よりも「音が出る」ことに焦点がある。(5b)ではその原義が典型的に現れている。ここでは完全な発話ではなく、sorry の最初の音をだしたことを go で表している。

1.2 Here you are/ There you are

Here you are もモノを差し出すときに使われる定型的な表現である。とくに相手が求めているものを差し出すときの表現で、相手に焦点が置かれている。類似の表現に、“Here’s your coffee, sir. Enjoy your dinner.” (TZ12)のような言い方があるが、これはレストランなどで聞かれることばで一番丁寧な響きがある。Here you go, There you go, Here you are, Here’s X はいずれも何かを差し

指すときの表現だが、それぞれ丁寧さや使われる状況に違いがある。

There you are は、相手の存在を確認する場面での表現である。

- (6) A: “Ms. White?”
 B: “Oh, there you are.” (TZ04)
- (7) A: “Hello.”
 B: “There you are.”
 A: “Where else? I keep regular office hours.” (TZ05)

(6)は A が B に呼びかける場面である。一種の応答表現として使われている。

(7)は電話でのやりとりで、B が A を声で存在を確認している状況である。A が where else? と答えているので、there は場所の意味を維持していて、ここでは文字通り電話の先の場所を指している。

人ではなくモノであれば、There it is といった表現となる。逆に、手の届くような近い場所であれば、Here it is となる。Here it is は、人よりも場所に焦点があり、そのため、ちょっと探しているものが見つかって「あ、あった」といった語感で、探していたものを確認するような言い方である。また、Here we are であれば、自分たちの現在の場所を共に確認するような響きとなり、これは目的地などに到着した時の定型表現である。

正置型 You are there は主語の場所を無前提に伝える単純な文である。しかし、There you are は、《You are [X] (相手が場所 X にいる)》という前提がある状況での発話である。その前提の上で、there を対比的に選ぶので、前置要素に対比強勢が置かれる。

2 SVC のパターン

第 2 文型を見よう。ここでは、S={that, this, it}, V={be}, C={it, all, that} の要素の組み合わせで定型化している事例を見る。

2.1 That's it

指示詞と非人称代名詞だけの単純な文であるが、SL では頻出度が極めて高い表現である。that は「言語外」の存在とつながりを付ける働きを持ち、基本的に、言語外の指示対象 (extralinguistic reference) を談話内に新たに導入する。話し手が that で指す対象は話し手にとっても新たに気づいたものがある。そのためある種の驚きの気持ちなどを含んでいる。一方、it は名詞の代わりとなる表現(pro-noun)なので、原則として、言語コンテキスト内の表現を示し、原則として、旧情報である⁴。(8)で見てみよう。

- (8) A: Is this what you're looking for?
 B: Yes, that's it.

(8)では、that は A が場面で見せているモノを指している。B が that を使うのは、それを旧情報として扱わず、話し手自身が仕切り直して、新たなものとして談話内に導入しているからである。他方、it は A の言語化により B と共有することになった情報、つまり what I'm looking for を指す。

(8B)を“Yes, it is”というふつうの応答と比較してみる。この場合の it は、A の this を指しており、指示対象を旧情報として取り扱っている。is 以下は省略である。“Yes, it is”は単純な返事になるが、that's it では、B が目の前のモノを新情報として導入しているために、A との共有がなく、むしろ B 側での視点が加わっていると言える。従って、例えば、「ずっと探していた…」とか、「どこにあるかと思っていたら…」とか、軽い驚きなど感情的移入がある。

That's it の定型化が進行して場面に密着した定型的表現となったときは、指示詞も代名詞もそれぞれがなにを指しているか漠然としてくる。通常代名詞には強勢がないが、that's it の it に強勢が置かれるときがあり、その場合有無を言わさぬ終了性を意味する。

- (9) A: “Coffee, please. Black.”
 B: “All right. One coffee, but that's it. Kitchen's shut down.”

(TZ01)

- (10) a. OK, that's it. I can't stand it anymore.
 b. Hey! That's it!
- (11) A: Do you need anything else, sir?
 B: No, no. *That's it.*

(9)の *that* はコーヒーを指していると言えるかも知れないが、(10)や(11)では *that* が指示対象を言語表現として文脈から探し出すことはできない。定型表現としては、何らかの状況が段々と進行している事態認識があり、ある段階になってその進行を止めるような意味で、*that's it* が使われる。この場合、*that* はある段階に達している事態であり、話し手はそれを新事態として認識して *that* で指している。一方、*it* は話し手が聞き手と共有していると思っていること、例えば、お互いに思っているやめどきを指すと言える。(10b)は目の前で口論などを行っているような状況で止めに入る時のことばである。(11)はレストランなどで食事が進行しており、その途中でウェイターが「他に何か」と言っている状況である。*that* はその場面での食事の状況で、*it* は互いに思っていること、ここでは、食事の終了、やめどき、である。

(11B)を日本語で言えば、「これで結構です」といった「これ」を使うような場面である。ここでは日本語と英語との遠近がずれている。*that* に関する日本語とのズレについて他の例で見てみよう。(12)はホームレス同士の会話で、野外で酒を飲んでいたら、ギャングの一味が袋に入れた死体を捨てに来る。知らずに袋を開けたら、その死体が新品の靴を履いていた、という場面である。

- (12) A¹: “Guy’s got a pair of shoes on, brand-new.”
 (「こいつ、靴履いているゾ、新品のな」)
- B¹: “I wouldn’t touch them if I was you.”
 (「オレだったら、放っておくよー」)
- A²: “My size, too.” (「サイズもオレんだ」)

B²: “Careful, Nate. You’re fooling with the evidence.”

(「ネイト、やばいよ、証拠ダメになるよ」)

A³: “Look at that! Perfect. Wonder if there’s anything in the pockets.” (TZ06)

A³の発話状況は、Aが靴を履いて、その靴を見て言っている。日本語では、「これ、見てみる、完璧だ。ポケットにも何かないかな」といった文脈である。問題は、A³の *that* はなにを指しているのか、ということである。*that* は靴を指すことはできない。この *that* は、Aが自分が靴を履いてみて、その時に発生した新しい状況、例えば、履き心地などを指しているのである。*that* には新しい状況に対する感情的な移入を含んでいる。

That’s it には疑問文形式もある。この場合も、*that* は外界の事態、*it* は話し手が聞き手と共有していると思っていることで、相手が心の中で思っていること・感じていることを確認するようときに使われる。

- (13) a. “Are you visiting? Is that it? Are you visiting somebody in the building?” (TZ06)
 b. “... So I’m 51. Too old for Suzanna. Is that it?” (TZ05)

(13a)は、自分のアパートの廊下で一人の女の子を見て、見知らぬ子供であったので、不思議に思って確認しているところである。指示詞 *that* は「不思議な女の子が訪問している」事態そのものを指しており、*it* は女の子の思っていること、ここではその子がそこにいる理由である。(13b)は、話し手が結婚を誓っているスザンナの自宅を訪問し、友人であるスザンナの父から、結婚には反対であると聞かされて言うことばである。*that* は、話し手がスザンナに対して年が離れているという談話に導入された事態を指しており、*it* は相手か思っていること、ここでは結婚に反対している理由である。(13)で定型表現を使わなければ、*Is that what you think?*ということである。

(14)は、Aが魔法で自分たちの乗っている乗り合いバスを高級車に変えよ

うとしたら、古びたおんぼろ馬車になったので、おもわず B が叫ぶ場面である。ここでも、*that* は B から見て決して遠いものではなく、B が経験している状況である。

- (14) A: “All right then. Here goes.”
 B: “Is that it?” (TZ07)

that は目の前に突然起きた新事態を指し、*it* は A と B が共有していること、ここでは魔法で実現しようとしたことを指す。

以上のように、*that* は言語外の事態や事物を指示するが、代名詞の *it* は話し手あるいは聞き手の頭の中にあることである。*it* を使用することで、話し手は聞き手と何らかの情報を共有していることを強要する。

that's it には他に種々要素が付加する事例がある。まず、*then* が付加されると、活動の終了を宣言した上で、次の活動への移行を暗示する。この場合、*well* や *OK* が現れやすい。

- (15) a. “*Well, I guess that's it then.*” (TZ10)
 b. “*Well, that's it then.*” (TZ01)
 c. *OK, that's it then. See you guys next week.*

作例の(15c)は授業の終わりのときの言い方の一つである。いずれも次の行動へと促している。また、*will* を伴って、“*OK, that'll be it then.*”となることもある。この場合、視点の置き方が異なって、終わりの着前に視点がある感じになる。

次に、副詞 *just* が付加した *That's just it* では、自分の言ったことに相手が誤解したか、あるいはそれ以上のことを解釈されたときに、自分の発言や考えを再確認するようなときに使われる。ここでの *it* は *what I was thinking* といった内容を指す。

- (16) A: "...think about nothing but facts, figures..."
 B: "There're other jobs."
 A: "That's just it. Nothing wrong with my job. I like it." (TZ11)
- (17) A: "You're always on time. Sort of takes the mystery out of things."
 B: "So I'm not mysterious enough for you."
 A: "That's just it. You're too mysterious, except when it comes to keeping dates. Get in here." (TZ05)

(16)は夫婦の会話である。妻 B は夫 A の発言を仕事の不満と解釈して、「他にも仕事がある」という言い方をしてしまう。そこで、夫は不満ではなくて、仕事の内容を言っただけ、それ以上の意味はない、といった意図で使われている。(17)は恋人同士の会話で、女性 A は男性 B が時間通りの行動なので、「mystery がなくなる感じ」、というので、B が「君にとって、自分が mysterious じゃない、ということかな」と訪ねる。そこで、それ以上の意味はない、という意味で使っている。日本語の「ちょっと言ってみただけよ」といった語感であろうか。

また、it の部分が about it となると、it の直接性を減ずる効果を持ち、「そういうところですよ」といった語感である。

- (18) A: Do you know Japanese?
 B: Yeah, Arigato, sayonara, domo, that's about it.
- (19) A: I heard you passed the bar exam when you were a student. Is that true?
 B: Well, that's about it.

about は周辺を表す前置詞であるからであろう。

また、何かすてきな言葉などが浮かんだときに That's more like it といった表現が使われる。that は直前に口に出た表現を指す。it は話し手が頭の中で考えていたこと、求めていたことを漠然と表す。

- (20) A: “Lincoln Continental, real snazzy.”
 B: “That’s more like it. Driver, take us to the lady’s residence.”
 (TZ07)
- (21) “William Feathersmith. What a crock! Alexander Feathersmith is more like it.”
 (TZ12)

(21)のように that の代わりに指し示す表現が置き換わる場合もある。

2.2 That’s all

it と違って、all のあとに何らかの関係詞節が隠れている語感がある。(22)では、I ask が現れているが、That’s all だけでもよい。その場合は、節末に付加的に使われる場合で、only の意味を強める念押し的な言い方である。

- (22) “Give me back with Detrich. Let me start out there. That’s all I ask.”
 (TZ12)
- (23) A: “What’s that?”
 B: “They’re closing the door, that’s all.”
 (TZ11)
- (24) A: Why is Jim the top salesman?
 B: He tries, that’s all.
- (25) A: Why is Jim the worst salesman?
 B: He tries, but that’s all.

(23)は、精神的に不安定な A が飛行機のドアが閉められる音でびくついたので、They’re only closing the door といった意味である。That’s all they’re doing と関係節を付けることもできる。That’s all は(23)のように、節末に付加的に使われるが、独立した文となると意味に違いを生む。例えば、(24)は、他に何かしているわけではないが、一生懸命しているだけだよ、というような意味だが、(25)は、何か不足している、という感じである。

2.3 That's that

この形式は応答として成り立ちにくく、「それでおしまい」というような意味になる。「そういうことで、それ以上はない」という感覚だろう。

- (26) “You’re acting like a baby. I can’t see you now, and that’s that.”
(TZ13)

状況指示としては、that は前方照応・後方照応ともに可能であるが、This の場合は後方照応しかできない。“This is it.”は、これから起こる事態について、話し手と聞き手が期待したことである、といった意味で、例えば、これから大舞台に立って演技をするようなそういう場面にふさわしい。

2.4 it's that

次に that と it が逆転した例を見てみよう。It's that は、例えば、“Which ball is yours?”の返事としては可能であるが、定型化した表現ではない。定型化した表現では、that は指示詞ではなく、that 節の断片である。また、It's that だけの表現はまれで、not や justなどを伴って現れる。

2.4.1 It's not that

先行する文脈で聞き手が話し手の意図とは違ったことを推論している状況があって、その誤解を話し手から修正するようなときに使われる。そして、この表現の後には話し手が本来意図していたことが現れることが多い。

- (27) A₁: I can't make it this summer.
B: If you don't have enough money, I'll pay the tickets.
A₂: It's not that. I just don't have time.
- (28) A: “Can't find all the books? The research library isn't supposed to check out a certain materials, but sometimes...”
B: “It's not that. I've got everything I need, but the authors on the

list, they don't agree with your version.” (TZ05)

(27)の A₂ を全部書き出すと、*it's not that I don't have enough money, but that I just don't have time* ということである。But を挟んで、前半で that 以下が省略され、後半で that 以下だけが現れている。前半は誤解されたこと、後半が修正しようとした真意である。一方、(28)は、学生 B が論文を書けないことを教授 A に相談している場面である。A が図書館の問題だと勘違いして発話していることに對して、B が *It's not that* と言っている。全部書き出せば、*It's not that the library doesn't check out necessary materials, but that the authors on the list don't agree with your vision* になる。同じようなパターンが見られるだろう。

2.4.2 It's just that

談話の中で、話し手が何らかの誤解などが発生していると感じていて、それに対する説明や理由を付加的に添えるような状況で使われる。

(29) A: John, you look sick. Do you have a hangover?

B: No, no, it's just that I have a cold.

B の冒頭の no は、*It's not that I have a hangover* の not に対応すると考えられる。この *it's just that* は、前節の *it's not that* とある種の相関性を持った表現である。

現実の例は非常に文脈に依存するので、長めの引用で見てみよう。(30)は教員同士の会話である。A が B に対して、たまには息抜きしないとダメ、と仕事後に誘い出そうとしている場面である。

(30) A₁: “Then don't you think it's time to loosen up? Do something for yourself once in a while. You know, what they say, “all work no play.”

B₁: “I go out sometimes.”

A₂: “Yeah? When?”

B₂: “Well...”

A₃: “See...”

B₃: “It’s just that with all the homework and extra credit...”

A₄: “You spend more time on it than they do.”

(TZ06)

A₂ から A₃ にかけて、B は外出を渋っていることについて A に誤解されている、と感じている。この TZ のエピソードでは、B は子供の頃のある事件が原因で、パーティーなどに出歩かない設定になっている。そこで、子供の世話に時間をかけている、という理由を添えているのである。It’s just that は「本当の理由は...である」といった語感で使われる。

基本的に、it’s that は not や just を伴って使われて、「...ではなく、...なのである」といった文脈状況で発生する。例えば、お金のことを話している状況があったとする。そして、相手が自分について金がないのか、と誤解するような場面であれば、(31)のような言い方が可能である。

(31) It’s not that I don’t have money. It’s (just) that I want to save money.

これが、前節のように、“It’s not that.”だけの場合もあるし、(29)のように、“No, it’s just that...”だけということもある。

さらに、not と just が同時に現れることもある。

(32) A: Maybe you don’t want to go to the party. It’s too expensive, isn’t it?

B: It’s not just that. I don’t like that restaurant.

2.4.1 節の It’s not that の方は直接的に否定している語感だが、It’s not just that の方は、相手の言ったことを認めた上で、他の理由・別の理由を伝える語感

である。WL であれば、not only～but also の相関表現で書き表すところだろう

3 SVO のパターン

他動詞文型で見てみる。ここでは S={I, you}、V={have, do, get, make, say}, O={it, that}の組み合わせで観察する。

3.1 I've had it

ふつうは完了形で使われ、「もう十分だ」、「もううんざりだ」といったときに使う。

- (36) a. "I've had it for the day. I'm gonna take the rest of the afternoon off." (TZ02)
 b. "That's it! I've had it." (TZ14)

it は話し手が聞き手と共有していると思っていることを指している。ここでは、ある種の限度に達した状態である。(36b)の事例で分かるように、that's it の it と同じような状況を指している。

3.2 You can have them/it

「相手が have できる」という意味ではなく、話し手の方が「～はいらない...」といった語感である。これもうんざりするようなものに対して使うことが多い。

- (37) a. "... People, as far as I'm concerned, you can have them. If I had my way, I'd make them all disappear, every last one." (TZ13)
 b. "Agh, you can have it. Everything about this place is nuts." (TZ15)

この場合の代名詞は文脈で現れているものを指す。(175a)は、人嫌いな主人

公が、人が作り出す喧噪を嫌って、「people はいらない」といっているところである。

3.3 You did it

お互いに了解していることが為されたときの表現で、一般には、ある行為を賞賛するときに使われる。

- (38) a. “Devlin, you really did it. I look 50 years younger.”
 (「デブリン、さすがだな」) (TZ12)
- b. “Now you done it. Somebody called the cops.” (TZ06)

(38a)はデブリンという女性に若返らせてもらうことになり、鏡を見ての言葉である。it は話し手と聞き手が共通に認識している事態、ここでは話し手が若返ったことを指している。一方、(38b)はホームレスの英語のため文法上 have が抜けているが、一般に、“Oh, now you did it.”や“Now you’ve done it.”(「ほら、やっちゃまったな」)のように、now がつくと、不都合な意味になる。

よく似た表現に You made it (「やったね」)がある。make の場合は、do に比べて、何らかのプロセスや目的指向的な行為について使われるようである。例えば、卒業した人には、“I’m so glad you made it. Congratulations.”というように make を使う方がふさわしい。

3.4 You do that

相手の申し出や提案に対して、「やれば」といった無関心を表す言い方で、I don’t care といった態度が隠れている。

- (39) A: “In that case, I think we better keep a real close eye on you, too.”
 B: “You do that.” (TZ10)

また、何かを要請されて、“Sure, I’ll do that”といえはその場での行動ではな

く、「しておきましょう」と言ったような簡単な約束である。しかし、“OK, I’ll do it”といえ、すぐにでもその場でやるような語感である。

3.5 Got it, I get it; I got you; you got me

get は主語と目的語の位置にいろいろな代名詞が出現して、定型化が広く観察される。Got it を上昇調で言えば、状況省略の例で、You got it? (「分かったかい」) の意であり、下降調でいけば、同じく状況省略で、I got it (「了解」) の意である。

- (41) A: Can you come tonight?
B: OK, you got it. No problem.
- (42) A: I’ll pick you up at 2. You got it?
B: Yeah, I got it.
- (43) A: “Don’t tell me you got more than one this morning.”
B: “Ah, I get it. Change your mind, did you?” (TZ16)
- (44) A: “Ah, what was that?”
B: “Ha-ha, Got you.”
A: “Er...it’s you, Susan, er...I thought a bee stung me.” (TZ17)

(41)の You got it は、話し手の聞き手への要求がちゃんと伝わった、ということ伝え、その結果「分かった、するよ」という意の応答である。単なる sure などの意味と違って、ある行動をするときに時間差があるような語感を持つ。他方、I got it は、言われた内容を頭で受け入れた・了解したという意味である。(43)のように、現在形もある。この場合は、言った内容そのものというより、言っている内容の背後の思考などに言及している語感である。例えば、抽象画を前にして、You got it? と聞くことはできるが、You got it? は不自然である。(44)では、get は「だます、かつぐ」といった意味で使われている。「一本取った」といった語感で、また、逆に、相手の言った冗談を真に受けてしまったようなときに“You got me.” (「やられたわ」、「一本取られたわね」) といった

応答表現がある。

3.6 You can say that again

最後に、機能語とは言えないが、*common verb* の一つである *say* を加えておきたい。*You can say that again* は相手の言ったことに完全な同意を表すときに使われる。

- (46) A: “You do look hungry.”
 B: “You can say that again.” (TZ15)

that は現実の世界にあるモノを指示するので、ここでは、A がすでに音声化した言い方を直接的に示す。従って、必ず誰かの実際の発言を受けている。

次の対比を考えてみる。

- (47) a. Don't say it!
 b. Don't say that!

it は話し手が聞き手と共有していると認識しているモノを指す。そのためふつう *it* はコンテキスト内での表現を指し示す。しかし、(47a)のように *it* がいきなり使われると、コンテキスト内に表現がないために、まだ口にしていないが、しかし頭にあると話し手が思っていることを指すことになる。従って、(47a)は、「(言いたいことは分かっているから)、それは言うな」といった語感であり、*it* は *what I think you're gonna say* を表す。一方、(47b)は、すでに発話され、言語外の存在として外在化したことを指す。従って、「そんなことを言うな」という意味である。

類似の定型表現で “*You said it!*”がある。この表現は過去形で使われ、ここでは *it=what I was going to say*、つまり、今にも自分が言おうとした頭の中にあつた表現を指しているのので、「その通り！」といった意味になる。

4 まとめにかえて

本稿では主に機能語からなる場面に密着した定型的な表現を考察した。日本語にも場面に密着した表現があるが、定型化の方向には個別言語の特徴が反映している。最後に英語と日本語の定型化の方向の違いについて簡単に触れたい。

第1節で述べたように、英語では飲食物を差し出すときに、go などを使って相手に行動を促す形の表現形をとる。日本語ではおそらく「コーヒーです」とか「コーヒー」といった表現になるだろう。日本語では、相手とは無関係に差し出した物を述べている。この日本語を英訳した“*This is coffee.*”という表現がコーヒーを差し出すときに奇妙なのは、この英語表現が話し手の判断を伝達して、コーヒーが何かを知らない人に対することばとして聞こえるからである⁵。また、別れの挨拶として、日本語では「さよなら」というが、「さよなら」は「左様ならば」を由来とする表現で、元来は話し手から見た場面状況を表す表現である。相手に対して何かを伝達しようとする表現ではない。一方、同じ状況では、英語では *See you* という。これは、*I'll see you* から来ているので、明らかに「また、会いましょう」という意志を相手に伝えている。こういった場面に密着した定型的な表現には個別言語の違いが反映していると思う。例えば、娘が父の日のプレゼントを渡す場面を考えてみると、日本人は「おとうさん、これ父の日のプレゼント」といって渡すであろう。プレゼントを手に行っている状況で、「プレゼントだ」というのが日本語である。だが、そこには伝達された情報はない。英語であれば、“*Happy Father's Day, dad*”のように言って差し出すであろう。すると、これは *I wish you Happy Father's Day* ということなので、明らかに娘の願いが伝達されている。

日本語はある意味で「確認型」の言語とも言うべき存在で、目の前の状況を言語化してもおかしい感じはしない。むしろ、目の前の状況を述べることで真の意図を察してもらい、といった側面すらある。一方、英語は本来的に「伝達型」の言語であって、ことばは相手に何かを伝達するために使われる、といった前提があるような言語である。日本語で「危ない！」と叫ぶときに、英語では“*Watch out*”のように命令文で相手への伝達として叫ぶ。日本語で「や

ばかった、危なかった」と言うような場面では、英語では“*You cut that pretty close*”のように発して、やはり相手に対する伝達として述べる。こういった違いが生まれるのは、何らかの文化的な違いに由来するのか、あるいは、個別言語の仕組みの違いに由来するのかは興味深い課題である⁶。

引用した事例の出典

TZ01: *Will the Real Martian Please Stand Up*; TZ02: *Mind and the Matter (the)*; TZ03: *Black Leather Jacket*; TZ04: *The After Hours*; TZ05: *Long Live Walter Jameson*; TZ06: *Dead Man's Shoes*; TZ06: *Nightmare as a Child*; TZ07: *Cavendar is Coming*; TZ10: *Monsters are Due on Maple Street (the)*; TZ11: *Nightmare at 20,000 Feet*; TZ12: *Of Late I think of Cliffordville*; TZ13: *Chaser (the)*; TZ14: *Gentleman, Please be Seated*; TZ15: *Elegy*; TZ16: *Static*; TZ17: *Caesar and Me*

参考文献

澤田茂保(2012) 「はなし言葉と直接引用—real-time の発話での直接引用形について—」『言語文化論叢』第16号、63-86.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

¹事例の多くはラジオドラマの *Twilight Zone* (以下 TZ) シリーズから引用した。TZ に続く二桁は同シリーズのエピソードの番号。エピソード名は文末に掲載。なお、TZ シリーズからの実例には引用符を付けてあるが、作例には付けていない。

²SL での引用形式については澤田(2012)参照。

³EJ は *English journal* のインタビューからの引用である。EJ 後の4桁は引用した記事の巻の西暦、次は月である。

⁴代名詞は旧情報(given information)を表す。相手も了解していると話し手が感じている情報である。一方、指示詞の *that* は強勢を受けて、ある種の新情報あるいは対比的な情報を表す。従って、驚きの感覚を伴う。(Quirk et al. 1985: p. 877 参照)

⁵但し、何人かいる場面であれば、*This is (coffee) for you* のような表現はある。

⁶例えば、本稿の事例で見たように、定型表現において I や you などの人称代名詞が多用され、このことが相手への伝達性を高めているようにも思う。一方、日本語には真の意味での代名詞表現は存在しないので、そのため表現自体に相手への関わりをもたらす要素が少ない。